

「スペインの悲劇」における 亡霊アンドレアの役割

谷 崎 寿 人

1

トマス・キッド (Thomas Kyd) 作「スペインの悲劇」(The Spanish Tragedy) の製作年代は明らかでない。¹⁾ 推定によると1582年から1592年の間ということになる。1582年は、トマス・ワトソン (Thomas Watson) が彼の「恋愛詩百編 (Hecatompethia)」を出版した年であり、「スペインの悲劇」第二幕 第一場に「恋愛詩第四十七」を模倣した数行が用いられていることから、「スペインの悲劇」はこの年以前に作られたものではないといえよう。また1592年は「スペインの悲劇」が「出版組合登録簿 (Stationers' Register)」に記載された年である。当時著作権は出版業者にあった。出版業者は作家から原稿を買いとって、それを印刷業者、出版業者で組織している出版組合に登録して印刷販売の権利を得るにいたったものである。したがって出版組合登録の記録は作品の執筆年代推定には、きわめて重要な資料となっている。

しかし1582年から1592年の10年間のうちいつであったかは決定しがたい。推定の資料はいくつかあるが、そのひとつは同時代の劇作家ベン・ジョンソン (Ben Jonson) 「バーソロミュー・フェア (Bartholomew Fair)」の Induction (107~110) に

He that will swear *Jeronimo* or *Andronicus* are the best plays yet, shall pass unexpected at, here, as a man whose judgement shows it is constant, and hath stood still, these five and twenty, or thirty years.²⁾

とある。「バーソロミュー・フェア」は執筆、初演は1614年であるから、「スペインの悲劇」が、1614年の25年から30年前ということになると1584年から1589年の間に作られたものとなる。しかし上の引用文中の「タイタス・アンドロニカス (Titus Andronicus)」の出版登録は1594年であり、これ以前に上演された記録がない。となると並べてある「ヒエロモ (Jeronmo)」(「スペインの悲劇」のこと) も1584年~1589年の作ということにはならない。またエドワーズ (Edwards) は Jonson is clearly talking in round figures³⁾ (イタリック筆者) といっているが、こうなるとまったく不

明であることになる。

その他の根拠としては、やはり同時代の作家トマス・ナッシュ (Thomas Nashe) が同じく作家のロバート・グリーン (Robert Green) の「メナフォン (Menaphon—韻文まじりのロマンスであって戯曲ではない) (1589年出版)」のために書いた序文の中でトマス・キッドの悪口を言っていると思われる個所があり、これがキッドおよび「スペインの悲劇」を指すものであると解釈できる。この解釈が可能であれば、「スペインの悲劇」の作られた年代は1589年以前となり、1582年～1589年の間ということになる。しかしこれとて、ナッシュはキッドのことを言ったのではなく、その時代の作家全般をからかったものという説もある。キッド全集の編者ボアズ (F.S. Boas) は、「ナッシュの非難のまとなっている人物は『悲劇を書くことを断念し、イタリヤ語の翻訳に手を出すようになった。』そしてキッドはタッソーの (Tasso) *Il Padre di Famiglia* を翻訳して1588年に出版しているから、『スペインの悲劇』はその年(1588)以前に作られたことは大いにありうることである」⁴⁾ といっている。これによれば製作年代は1584年～1588年となり、いくぶんその範囲をせばめることになる。さらに彼ボアズはその他の推定の根拠にあげて1585～7年をあげているが、もちろんこれにはいくつかの反論がある。

現存する最古の版は1592年の版となっている。その後1594年に第2版が、1602年には“Addition”が加えられている。この加筆はベン・ジョンソンによるものとされていた。それはフィリップ・ヘンズロウ (Philip Henslowe—当時の劇場経営者で、1592年から1603年まで、劇場の収支をしるした「日記」がある) の「日記」にそう記されているからであるが、その後これがはたしてベン・ジョンソンの加筆であるか疑問視されている。

この戯曲は流血悲劇の傑作とされ、当時上演されることの多かった作品である。この作品に影響を与えているのは、ヴェルギリウス (Virgil)、セネカ (Seneca)、同時代ではロベール・ガルニエ (Robert Garnier) であって、特にガルニエの作品コーネーリア (Cornelia) をキッドは英訳している程であるから、その影響は著しいといえよう。

主人公は、宮内司法官ヒエロニモ (Hieronimo) であろうし、「ハムレット」とは逆に息子ホレイシオ (Horatio) を殺された父ヒエロニモが復讐を決意し、劇中劇を案じて、その実行の中で復讐をおこなうというものであるが、「ハムレット」以上に亡霊の台詞、役割が重んじられているといえよう。アンドレア (Andrea) の亡霊は各幕の最終場に、常に復讐の霊をともしない登場して、第四幕を除き、それぞれの幕のう

ちで彼の思い通り事が運ばぬことにいらだち復讐の霊に訴える。復讐の霊はアンドレアの霊をなだめて、一步一步舞台の上の人物にはたらきかけてアンドレアの欲する結末へと導いてゆくのである。ヒエロニモも、いわばアンドレアの傀儡と言ってよいだろう。

2

第一幕第一場は、アンドレアの亡霊と復讐の霊のみ登場、アンドレアの亡霊が自分はどうしてここにいるかを、おおよそ次のように物語る。それによると生前彼は名をドン・アンドレアといいスペインの宮廷に仕えていた。その時、ある高い身分の女姓（ペルーインペリア、Bel-imperia—スペイン王弟カスティール公の娘）を恋人としていたが、ポルトガルとの戦いにおもむき戦死した。アンドレアの魂はアケロンの川（Acheron 冥界を流れる川）に行ったが、渡し守カロン（Charon）に渡ることを拒否されたが宮内司法官の息子ドン・ホレイシオ（Don Horatio）が葬儀をおこなってくれたので渡ることができて、次にこの魂をどこへおくかで三人の裁判官が三様の主張をした。そのため冥界の王プルートー（Pluto）のところへやられて王の決定にしたがうことになった。冥界の王宮でプルートーと、妃ペルセボネ（Proserpine）に会い、その結果ペルセボネが判決を下すことになり、復讐の霊にともなわれて再び地上にもどってきた。

復讐の霊はアンドレアに、彼の生命を奪ったポルトガルの王子バルサザー（Balthazar）がペルーインペリアの手にかかって命をおとすのを舞台上にすわって見まもり、悲劇のコーラス役をつとめようという。

第一幕第二場以後の筋はかなり複雑であるが、観客には最初から結末が明白になっている。したがって観客の興味関心は、結末にいたる間の復讐、流血にあるといえよう。セネカ劇がどのように模倣されて舞台上で展開されるかが期待されていたわけである。

第二場は、まずスペインの将軍が、スペイン王に自軍の勝利を報じ、ポルトガルがスペイン王に臣下の礼をとり、貢をおさめることになったことを報告する。両軍の戦闘の経過の中にアンドレアの奮戦と、バルサザーがアンドレアを倒したこと、ホレイシオがバルサザーを捕虜としたという。バルサザーが、スペイン王弟の息子ロレンゾ（Lorenzo）とホレイシオにはさまれて登場、王のふたりのいずれが捕えたのかの問いに、ふたりとも自分がというので、ホレイシオにはバルサザーの身代金、ロレンゾには身柄をあずけることで解決する。

第三場。ポルトガル太守（王）は已れの宮廷で息子バルサザーが戦死したものと思ひこみ歎いている。そこへ貴族アレクサンドロ（Alexandro）がバルサザーが生きて捕虜となっているという。別の貴族ヴィラッポ（Villuppo）は、バルサザーは戦死、しかも味方のアレクサンドロが背後からピストルでうち倒したといつわりの報告をする。太守はいつわりを信じこむ。

第四場。ペルーインペリアがホレイシオに、恋人アンドレアの最期の様子をたずねる。ホレイシオは、バルサザーと彼の槍部隊がアンドレアを殺害、そのバルサザーを捕虜にしたことを詳細に述べる。ペルーインペリアは、アンドレアのためにバルサザーに復讐することを誓う。この復讐を進めるためにホレイシオに好意をよせることになる。そこへロレンゾとバルサザー登場。バルサザーはペルーインペリアを恋している、ロレンゾはその恋の成就に力のかす。宮廷では宴会が催され、スペイン王はポルトガルの大使を仮面劇でもてなす。仮面劇はイギリスがポルトガルとスペインを攻め征服したことを物語るものである。

第五場で、アンドレアと復讐の霊だけが登場

Andrea. Come we for this from depth of underground,

To see him feast that gave me my death's wound?

These pleasant sights are sorrow to my soul,

Nothing but league, and love, and banqueting ! (I.v. 1—4)*

アンドレアは、復讐とはおよそ無縁の光景をみて腹立たしい思いである。第一に彼に致命傷を負わせたバルサザーが何のとかめもうけないばかりか、大使の招宴に同席できることはアンドレアにとっては見すごせないことである。第二にその国のためにアンドレアが命を捧げた国王は今や宴会ならびにポルトガル大使をもてなすのに懸命である。これは国王のアンドレアに対する背信行為に他ならない。復讐の霊はアンドレアをなだめている。

Revenge. Be still Andrea, ere we go from hence,

I'll turn their friendship into fell despite,

Their love to mortal hate, their day to night,

Their hope into despair, their peace to war,

Their joys to pain, their bliss to misery. (I.V. 5—9)

引用文は Philip Edwards 編 'The Spanish Tragedy' (The Revels Plays) による。

「スペインの悲劇」における亡霊アンドレアの役割

アンドレアは復讐の霊に今後の劇の進行を委ねることになる。

第二幕、第一場。バルサザーがロレンゾに言う。ペルーインペリアは少しも好意を寄せてくれぬと。ロレンゾはペルーインペリアがロレンゾを愛さぬのに何か原因があるからそれをつきとめると約束する。そして召使ペドリンガーノ (Pedringano) をおどして恋の相手はホレイシオであることをつきとめる。

第二場。ホレイシオとペルーインペリアの恋の話らしい場に、ペドリンガーノがバルサザーとロレンゾを案内してきて、ふたりの様子を見せる。

第三場。スペイン王が弟カスティール公にその娘であるペルーインペリアがバルサザーの求愛にどう言っているかたずね、ふたりの結婚の段取を話し、このことのためにポルトガル大使を帰国させる。

第四場。暗闇の中で、ホレイシオとペルーインペリアが語りあっているところへ、ペドリンガーノの手びきでロレンゾ、バルサザーあらわれ、あずまやにホレイシオをつるして刺殺する。ペルーインペリアは兄とバルサザーが下手人であることを知る。

第五場。ヒエロニモ叫び声をきいて起きる。庭のあずまやで息子の死体を発見して嘆く。妻イザベラ (Isabella) も登場して息子の死を悲しむ。

第六場。アンドレアの苦しみ憎悪は振幅が増大している。第一幕と異なる点は親友ホレイシオの死に直面したことである。

Andrea. Brought'st thou me hither to increase my pain?

I look'd that Balthazar should have been slain:

But'tis my friend Horatio that is slain,

(II. vi. 1—3)

ここにいたる前既にバルサザーへの復讐がなされていることを期待していたアンドレアにとって、ホレイシオの死は辛抱しかねる事柄である。復讐の霊は、まだその時機ではない「汝は、麦が青いうちに収穫の話をするのか (Thou talk'st of harvest when the corn is green: II. vi. 6) という。もっとも劇の構成上、ここでホレイシオをしてバルサザーを殺させたならば、悲劇の典型とはならず史劇ふうのものになる。悲劇における緊張感に欠けるものとならざるを得ない。緊張を持続してより複雑な結末へ進まなければならない。その意味で現段階は、まだ麦の熟さぬ状態なのである。一挙に復讐が成立してはならないのである。またこの段階ではホレイシオの両親にも息子殺しの犯人は全くわかってはいない。父親ヒエロニモは一旦はともに死のうというが復讐もせずに死ぬわけにはゆかないと決意する。アンドレア、ペルーインペリア、ホレイシオ、ヒエロニモの順で復讐が実行されるわけであり、前者が後者にい

いろいろの情報を与え、これはすべて先頭のアンドレアに発する図式である。

第三幕は十五場から成り立っている。第二場で、ヒエロニモの悲しみの長い独白があり、その中間で一通の手紙が落ちてくる。ヒエロニモあてのものであり、バルサザーと兄（ロレンゾ）がホレイシオを殺害したので、このふたりに復讐してほしいというのがその内容で、差出人はベルーインペリアである。しかし慎重なヒエロニモは畏ではないかと疑う。(Hieronimo beware, thou art betray'd/And to entrap thy life this train is laid. III. ii. 36—7) そしてこれが真実である証拠を集める決心をする。そのためにはベルーインペリアに直接会って聞こうと言う。

ヒエロニモが幽閉されているベルーインペリアの居場所をさがしていると知ったロレンゾは、ホレイシオ殺しが発覚したと思い、それを暴露したのはバルサザーの召使サーベリン (Serberine) と憶測し、ペドリンガーノにサーベリン殺しを命ずる。

第三場。ペドリンガーノはサーベリンを射殺するが、ロレンゾがあらかじめ配置しておいた夜警にとらえられ、司法官であるヒエロニモのところへ連行されることになる。

第四場、ロレンゾとバルサザーが会い、バルサザーは自分の召使が殺されたので、ペドリンガーノは生かしておかないといきまぐ。ロレンゾに獄中のペドリンガーノから赦免状が欲しいという手紙がくる。第五場で小姓 (Boy) が赦免状のはいった箱を届けにゆくが途中でそれを開いて中には何もはっていないことを知る。第六場は最後まで助命されると思っていたペドリンガーノが縛り首にされる。

第七場、ヒエロニモ登場して、絞首係が持参したペドリンガーノのロレンゾあての手紙を読む。その手紙から息子のホレイシオ殺しはロレンゾとバルサザーの共謀によるものであったことを悟る。ベルーインペリアの手紙の内容は真実であることを証拠だてる有力なものがあらわれたのである。第九場はベルーインペリアの独白でヒエロニモが復讐をためらっているのを遺憾とする。

第十一場。ふたりのポルトガル人がヒエロニモに (カスティール) 公爵邸への道をたずねると、「不信と恐怖の森に (Unto a forest of distrust and fear) 通ずる道を教える。」と言って狂気とみなされる。第十二場においてもヒエロニモはスペイン国王の面前で復讐を叫ぶ。この時は自慢の息子を殺されたための逆上ということですまされる。ひき続いて第十三場。冒頭 Vindicta mihi != Vengeance is mine (ロマ書12章19節) という。「復讐のためには天の意志を待て。」以下の独白が続く。その後訴訟の場で、訴えてきたひとりの老人に対してホレイシオとよびかける。老人は「あなたの息子ではない」という。

以上の第十一、第十二、第十三の常軌を逸した三例は、はたして狂気であろうか。そうではなくていつわりの狂気と解釈するのが観客の立場ではないか。悲劇成立のためには多様の伏線が必要となってくる。次の第十四場前半はスペイン国王、ポルトガル太守が集ってバルサーザとペルーインペリアの結婚が明日おこなわれる予定と話しあっている。カスティール公はロレンゾに対して彼がヒエロニモの王への歎願をしりぞけさせようとしているうわさがあると言う。ロレンゾは父を安心させるためヒエロニモと和解しようと言う。ヒエロニモよばれて登場し、これまでの恨みは水に流すと言って和解する。

これも観客にとっては、いつわりの和解である。前三場のいつわりの狂気と同様に。しかし、当然のことながら、コーラス役のアンドレアはこのロレンゾ、ヒエロニモ和解を黙許できない。復讐の霊にめざめよと言う。

Andrea. Awake, Revenge, if love, as love hath had,
Have yet the power or prevalence in hell !
Hieronimo with Lorenzo is join'd in league
And intercepts our passage to revenge :
Awake, Revenge, or we are woe-begone !

(III. xv. 13—17)

最後の or we are woe-begone とは悲痛である。亡霊が悲痛というのも、いささか滑稽にきこえるかもしれないが、復讐の霊にせよアンドレアにせよ舞台上にあってコーラス役である以上他の登場人物と同様のはたらきをなすわけである。ギリシャの神神が喜怒哀楽において人間と同様であったように、アンドレアも已れの計画の齟齬をそのままにしておくわけにはゆかない。なんとしても復讐劇は演じられなければならないのである。そこで復讐の霊は黙劇 (a Dumb Show) を演じさせることになる。黙劇の意味するものは「初めのふたりは婚礼のたいまつをかかげていた。……婚因の神がそれらを吹き消して血をあびせる……」ということであり、アンドレアもこの後は自分の意図するようになることを確信する。アンドレア、ペルーインペリア、ヒエロニモの線は切断されていないのである。こうして最後の幕があくことになる。

3

第四幕 第一場はペルーインペリアがヒエロニモが復讐を実行しないことを強く非難する。ヒエロニモに恥を知れと迫り、私（ペルーインペリア）がホレイシオ殺しの下手人たちの魂を地獄へ送るとまでいう。

...

Myself should send their hateful souls' to hell,
That wrought his downfall with extremest death.

(IV. i. 28—9)

このことばにはげまされたヒエロニモは、はじめて復讐を誓う。そして復讐の計画はすでにできていると言う。バルサザーとロレンゾ登場し、バルサザーが父ポルトガル太守をなくさめるため劇の上演を依頼する。ヒエロニモはかつて彼自身が書いた悲劇を上演するといひロレンゾ、バルサザーにも協力を頼み、さらにペルーインペリアも出演することになる。

これが「劇中劇 (the play-within-the-play)」となるものであり、第四場で演じられ、筋書きはホレイシオ殺しに似たものである。この中でヒエロニモはロレンゾを刺し、ペルーインペリアはバルサザーを刺し、次いで自分自身を刺す。ヒエロニモはスペイン王の問い (But now what follows for Hieronimo?) に対して、私の舌は息子 (ホレイシオ) の最期を物語るために動くと言って、息子の死体と息子の傷口から流れてた血で染まったハンカチを出して見せる。それぞれの死者の親たちに対しては、死んだ子が親にとって大切な子であるというのならホレイシオも同様であったと言い、拷問台にかけられる前に舌をかみきって吐きだし、さらに文字は書けるはずといわれ、ペン先を直すからナイフが欲しいという身振りをし、与えられたナイフでスペイン王弟カスティール公を刺し、かつ自分自身を刺して死ぬ。

第五場。アンドレアと復讐の霊最後の登場となり、アンドレアは自分の望みがなかったことをよろこぶ。

Andrea. Ay, now my hopes have end in their effects,

When blood and sorrow finish my desires:

(IV. V. 1—2)

さらにペルセボネに願って、味方 (ペルーインペリア、ヒエロニモ、ホレイシオ、イザベラ) は楽しく語ることのできる場所へ、敵 (ロレンゾ、バルサザー、カスティール公その他) は地獄のそれぞれふさわしい場所へおとすことを復讐の霊に頼み幕が下りる。

こうしてみると、表面の主人公は息子を殺され、真の狂気かいつわりの狂気かの期間を経て、ペルーインペリアの大きな助力により復讐を成就したヒエロニモということになるが、終始一貫アンドレアがいる。この戯曲の読みようによってはあるいは無関係の存在であるかもしれない。しかし観客にとっては亡霊アンドレアの存在は不

可欠であったろうと思われる。たとえば第四幕 第四場の最後の殺人すなわちヒエロニモが舌をかみきった後、ナイフを手にしてカスティール公を刺殺するのは蛇足とみえるかもしれないが、これはやはりヒエロニモにとって息子の仇はロレンゾだけでなく、ペルーインペリアとバルサザーの結婚を望んでいたカスティール公の心がロレンゾに影を投げかけていたので、復讐の対象となりえたのであろう。そしてさらにさかのぼるとカステール公はアンドレアとペルーインペリアの仲を認めていなかったのであるし、復讐の遠因はここにありということになる。結局ヒエロニモの決断をうながしたのは、直接にはペルーインペリアであるが、その背後にはアンドレアがいたということである。筋は複雑であるかもしれないが、最後にアンドレアが自分に味方する善人たちと、敵対する悪人たちの行末を截然とわけたように、個々の登場人物には権謀術数を弄するものもいず、しいてあげればロレンゾであろうが、すべて亡霊アンドレアのたなごころの中で踊らされていたのである。

注 1) Philip Edwards (ed.): The Spanish Tragedy (Methuen, 1959) xxi.

2) E.A. Horsman (ed.): Bartholomew Fair BEN JONSON (Methuen, 1960) p. 6

3) Philip Edwards (ed.): The Spanish Tragedy xxi.

4) F.S. Boas (ed.): The Works of Thomas Kyd (Clarendon Press, Oxford 1967, First Published 1901)

(たにざき ひさと 本学助教授 英語)